

# 自分史 (S.T.)

作成日：令和 3 年 2 月

## 【年表】

昭和 11 年 (0 歳)	東京に生まれる ※三人姉妹の末っ子
昭和 13 年 (2 歳)	生みの母死去
昭和 14 年 (3 歳)	父が再婚
昭和 18 年 (7 歳)	品川区立第四日野小学校に入学
昭和 21 年 (10 歳)	奥多摩に学童疎開
//	北海道に疎開
昭和 23 年 (12 歳)	目黒区下目黒小学校を卒業
//	目黒区目黒第三中学校に入学
昭和 26 年 (15 歳)	父の経営する精肉店の手伝い開始
//	目黒区目黒第三中学校を卒業
昭和 35 年 (24 歳)	ヤクルト就職
//	父が入院
昭和 37 年 (26 歳)	結婚
昭和 38 年 (27 歳)	長女出生
昭和 42 年 (31 歳)	次女出生
昭和 44 年 (33 歳)	父死去
昭和 45 年 (34 歳)	五反田 TOC に就職
昭和 58 年 (47 歳)	母死去
平成 7 年 (60 歳)	離婚
//	目黒ふれあい館憩いの家でのボランティア 寝たきり老人を作らないための「麻雀」「グランドゴルフ」 の部会の立ち上げ
平成 17 年 (70 歳)	マンション建設
平成 20 年 (73 歳)	次女と孫と同居
平成 27 年 (80 歳)	豪華客船で海外旅行

私は以前より自分史を作りたかった。私の生活は貧しく恥ずかしいものだったが、生き方は恥ずべきものではないと思っている。その私の人生を子供たちに知ってもらいたいと思っている。

私は、昭和 11 年に東京都目黒区下目黒で三人姉妹の末っ子として生まれた。

父（伊〇郎）は精肉店を営んでいた。彼は大阪の出身で、14 人兄弟の長男だった。父の

祖父は村を興すほどの大地主で大阪には彼の石碑が立てられている。しかし、父の父が借金をし、父親はその借金を返しながら兄妹を養ったので、生活的には貧しく大変だった。

母親は体が弱かった。昭和 13 年に亡くなった。私はまだ 2 歳だったので、顔は覚えていない。常に布団で寝ていたことを覚えている。しかし一度、母と背比べをして「大きくなったわね」と言われたことを覚えている。

姉は 2 人いた。上の姉は埼玉に住んでいるが、下の姉は亡くなっている。

生みの母の死去後、昭和 14 年に父は育ての母であるフジと再婚した。私たち姉妹も小さかったし、その頃は戦争間近だったので父が徴兵されると誰が子供たちを育てるのか、という問題もあり、知り合いの紹介で再婚したということだった。末っ子であるということで父は殊更私のことをかわいがったのだが、母はそれをよく思わず、父がいないときによくいじめられた。雨の日に外で立たされ、近所の人の不憫に思い、母にばれないようにおにぎりを持ってきてくれたことを覚えている。15 歳年上のみよこさんという父の妹も一緒に住んでいたが、母親にいじめられる代わりにその人によく可愛がられた。母は結婚する条件として、父に「お前は何かしなくてよい。一緒に住んでいる兄妹が子供たちの世話をするので安心して結婚してほしい」と言われたので、「私は何もしないわよ」というのが口癖だった。母は亡くなるまで本当にその意思を貫き通したので、父の兄弟と私たち子どもは大変苦労をした。

昭和 16 年に品川区立第四日野小学校に入学した。当時、ランドセルのようなものはなかったと思うが、家は貧しく、通学のための色々な備品を買ってもらえるような環境ではなく、生活は苦しかった。父の兄弟も何人か一緒に住んでいたが、働ける年齢に達すると近くの農家などに子守りの丁稚奉公に出された。その頃の我が家にある服はとても古かった。私は末っ子でもあったので、着るものはいつも「お下がり」の「お下がり」の「お下がり」だった。それだけ「お下がり」が続くと布地はとても傷んで薄くなっていた。それ故よく破れたが、その度に「お前はよく服を破ってくる」と母に怒られた。姉二人はもう大きくなっていたのでこういった困難から逃げるコツを知っていたが私は幼くて気が回らずよく怒られていた。後にその母が亡くなった時に、従妹（母の兄弟の息子）の良夫さんに「さっちゃんがおばさんにいじめられていたことはよくよく知っている。それにも関わらず 7 年間も一人でおばの面倒を見てくれてとてもありがたいと思っている。誰もさっちゃんにお礼を言う人なんていないだろうけど、俺はお礼を言いたい」と言って土下座をしてお礼をしてくれたことがとても救いになったし、嬉しかった。

昭和 18 年、奥多摩に学童疎開をした。私はまだ疎開をする年齢に至っていなかったが、姉たちもいたし、先生は私と母の複雑な関係も知っていたので特別に疎開を許してくれた。当時は雅叙園が赤十字病院になっており、敵がそこをめがけて爆弾を落とす、という噂もあって周りの子供たちはみんな疎開した。

しかし、奥多摩には半年ほどしかいなかった。母の妹が本所深川の東京第一空襲で大火傷を負って T 西家を頼ってきて、母の親類が多い北海道にみんなと一緒に疎開することに

なったためだ。その頃は汽車のチケットを取ることはとても難しかったが、その叔母の旦那さんが警察官だったので、特別にチケットを用意してくれた。母と3人姉妹、火傷を負った叔母の5人で上野から北海道に向かった。東京で炊いたご飯をお櫃に入れて、列車で食べたのを覚えている。北に北に向かったが、地元の人が列車の窓から差し入れとして食べ物をくれたのも覚えている。そうこうして何とか北海道の倶知安というところに着き、その後釧路に向かった。

釧路には母の兄弟が住んでいた。向こうは急に5人も訪ねてきてとても困ったと思う。夜に着いたが、「とりあえず今日はここで寝て」と言われた。朝起きてみると藁が体中にくっ付いていて驚いた。そこは馬小屋だったのだ。その家は馬車を使った運送業を営んでいたため、馬小屋がたくさんあった。その馬小屋の中で姉と一緒に歌を歌ったのは楽しい思い出だ。

いつまでもそこにいることはできないので、空き家を探して借りた。五軒長屋の二間しかない部屋に5人で住んだ。近所の人からも哀れに思われていて、よく食べ物をもたらした。東京では「ふーっ」と吹けば全てのお米が向こう側に寄ってしまうようなお米の少ないお粥しか食べたことがなかったが、釧路のご飯はもらいものではあったがとても贅沢なものでとても嬉しかった。

釧路にいる頃に一度父が様子を見にやってきた。その後、東京に残った洋服や生活必需品を取りに帰るため、父と母は二人で東京に戻った。その時にちょうど、沖縄に出兵予定だった父の弟朝男（あさお）が東京に来ていた。朝男は出兵途中に怪我をして沖縄に行けなかったのだ。両親と朝男は東京で合流したらしいが、その時に東京大空襲があったそうだ。3人はお不動さんのところで集合しようと言いながら、それぞれで逃げたらしい。翌朝、3人は無事にお不動さんと会うことができた。後に笑い話になったのだが、叔父は逃げる時「俺も男だ、何か家から持って出なきゃ」と思い、鏡台の鏡を持って逃げたそうだ。叔父はお不動さんにその鏡を持ってきたそうだが、今でもそれはT西家にあり、父が使っていた5つ玉のそろばんと共にT西家の家宝となっている。

昭和20年の終戦後、東京目黒に戻ってきた。辺りは焼け野原で、自分の家も無くなっていた。父が家にあった防空壕を見つけ、「これはうちの防空壕だ」と言い、自宅がここであると確認できた。その防空壕で何日か生活した。その頃はうちには、家族の他に朝男と昭三（あきそう）がいた。昭三は、まだ若かったが、予科練に入り横須賀から戦地に行くところだったが、その直前に終戦になり、目黒に戻ってきていた。周辺は歩くのも危ないくらいの焼け野原だったが、男手もあったので皆で木材を拾い、バラックを立てた。まず一つバラックを作り、その後増築していった。決して綺麗なものではなかったが屋根があるだけでした。拾ってきた穴の開いたブリキで屋根を作り、ムシロをドアにした。父が「うちは屋根に穴が開いているから星が見えていいだろう」と言っていた。雹（ひょう）が降った時もあり、穴から落ちてきた雹を父がほうきで履く姿を今も覚えている。その頃から庭でトマトやキュウリを育てるようになり、自給自足生活が始まった。そのバラックには2-3年は住ん

でいたと思う。雅叙園はお風呂の棟以外は残っていた。お不動さんや大鳥神社も一部焼けていた。

終戦後の昭和21年に目黒第三中学校を卒業した。その頃から父が病気になり、体調を崩すことが増えた。母は、結婚当初の「お前は何もしなくていい」という言葉を盾に本当に何もしなかった。体調が悪いのに一人で頑張っている父がかわいそうだし、私は末っ子でいつかT西家を出ていくので今だけでも父を助けたいと精肉店を手伝い始めた。父の精肉店は西品川と下明神の2店舗あった。精肉店は、人を使うこと、当時は冷蔵庫もなくて肉が痛みやすいこと、休みが全く取れないこと、など大変なことばかりだった。父は私に養子を取って精肉店を継いでくれと言っていたが、私は「養子はいいが、店を継ぐことは嫌だ」と言い続けた。10年ほど手伝っていたが、精肉店を切り盛りしていく自信はなかった。

昭和35年、精肉店を閉じ、私はTOCにあるヤクルトで働き始めた。元々知り合いの人がやっていた仕事だったのだが、その人が事故に会い、仕事ができなくなったので完治するまでの間のみ手伝う予定だった。しかし、私がやり始めると売り上げも伸び、新人賞をもらったりして、辞めるに辞められなくなった。結局、結婚するまでの2年間働いた。

昭和37年、結婚

昭和38年、長女（宏子）出生。宏子という名前は両親が付けた。当時も下目黒に両親と一緒に住んでいた。父親は孫を大変かわいがってくれた。当時は洗濯機なんてない時代だったが、長女のおむつの洗濯も大変だろうと父が洗濯機を買ってくれた。ひな人形も七段の大きなものを買ってくれたし、よく散歩にも連れて行ってくれ、近所の人に孫自慢をしていた。

宏子が1歳の時、熱が出たので病院に連れて行った。もともと扁桃腺が弱く、熱を出しやすかったのだが、病院の先生が「これは普通の熱ではない。すぐに大きな病院に見せなさい」とのことだった。ひきつけが酷く、体が硬直していた。舌を噛んではいけないということで、割りばしにタオルを巻き、歯に噛ましていた。あいにく、その日は日曜日だったので、病院が開いておらず、やっている病院を夫と共に駆けずり回って探した。結局、出生した厚生中央病院に入院できたのだが、当初、病院側は入院を渋っていた。その時、母が強気に病院と交渉し、入院を勝ち取ってくれた。このときばかりは母に感謝した。宏子は活発で、8か月で歩き、1歳でおむつも取れていたのだが、この病気のために歩けなくなったり、麻痺が残ったりするのではないかととても心配し、気が気ではなかった。

その後も厚生中央病院は対応が良くなかった。夫の兄弟のお嫁さんが蒲田の病院を紹介してくれた。宏子の体調がとても悪かった時に、その病院に連れて行った。とてもいい先生ですぐに原因を見つけますよ、と言ってくれた。その時の宏子は、体が冷たくなって力がなくなるようなときもあったので死ぬのではないかと心配で仕方なかった。夕方になって、「この子は助かるよ!」、先生が原因を見つけてくれたのだ。「小児リウマチ」だった。先生曰く、感染する病気なので、どこからか菌をもらったのではないかとのことだった。薬をその病気用のものに代えたらすぐに良くなった。

昭和42年、次女の俊子が出生。次女は近所の病院で生まれた。この子が生まれた時も嬉

しかた。長女に比べ、外で遊ぶことがあまり好きではない子供だった。何かこの子の得意なことを見つけてやりたいと習い事をたくさんさせた。引っ込み思案の所もあったが、学校の先生に相談するとその先生が色々な配慮をしてくれ、友人も沢山できた。俊子はその後、歯科衛生士になり、今では専門の学校で教鞭をとっている。俊子とはそんなに話しはしないが、彼女が生徒たち全員を国家試験に合格させてあげたいと頑張っている指導していることは知っている。

私が後悔していることは、子供と接する時間を多くとらなかったことだ。父や母の介護もしていたし、町会の仕事もあり、毎日忙しくしていたせいだ。

昭和44年、父が亡くなった。急性肺炎に三回なった末の肺がんで亡くなったのだ。亡くなる間際、兄妹や親せきは病院に集まった。大人数集まったので病院から人数制限を受け、病室に入れたのは母、私と主人、2人の姉だった。今でも覚えているが、6時5分前になった頃、母が煙草を吸いに部屋を出た、その時に亡くなった。いまだに父に何もしてあげられなかったことを悔やんでいる。

昭和45年、母も体調を崩しがちになっていた。その母の介護費や入院費を賄うために五反田のTOCで働くことにした。以前にTOCのヤクルトで働いていた時に知り合った洋品店の社長さんのお誘いを受けたのだ。タオルとかワイシャツ、ネクタイなどの紳士用品を扱う店だった。社長はおとなしい人だったが、私はこんな性格なので明るく振舞い、店の看板娘のような存在になっていた。10年くらい楽しく働いた。あるお正月に着物を着ていったらとても評判が良く、それ以降毎年正月は着物に割烹着で働くことになったのが楽しかった。私が選んだワイシャツとネクタイの組み合わせをお客さんが喜んでくれるのが嬉しかった。退職するときは久月のお人形を社長さんからいただいた。社長には、「今までたくさんの人を雇ってきたけど、こんなにいい人はいなかったよ」と最後に言ってもらえたのが嬉しかった。

昭和58年、母が亡くなった。元々脳梗塞を何度かやっていたが、最後は老衰だった。あまり私のことをよく思っていない母だったが、7年くらい看病をして大変だった。

平成17年、それまで住んでいた目黒の家をマンションに建て替えた。元々ある会社の営業の人が「マンションに建て替えた場合の無料見積もりを行っています」と営業に来たことが始まりだった。その見積もりを見たときに、「借り入れるお金は大きいけど、これなら返せるかも」と思った。しかし、そうはいつでも私にとっては大きな大きな事業だったので不安はとても大きかった。周りには女一人でこんな大きな事業ができるのか、出来るわけないからやめておいた方がいいよ、という人も多かったし、設計士や工事の請負業者などは私にこれだけ多くの金額の支払い能力が本当にあるのかどうか、本当に融資してもらえるのか、このまま事業を進めてよいのか、言葉にしては言わないが、疑心暗鬼の様子だった。そこで彼ら関係者を引き連れて銀行に話に行った。支店長と昔なじみの銀行員が対応してくれたのだが、支店長と一緒にいった業者に向かって、「あなた方が今日いらっしゃっている理由はよくわかる。不安があるのでしょうか。でも私たちはあなた方にお金を貸すのではない、T

西さんに貸すんだ。T 西さんはとても信用できる人だから私ども金融機関としては何も心配していない。喜んで T 西さんにお金を貸したいと思っている」と言ってくれた。この言葉はとても嬉しかった。今までの苦勞が吹っ飛ぶような喜びがあった。私はやはり人との出会いに恵まれていると思う。やはり、人間生きていくには信用が一番大切。大工が紹介してくれた設計士は小学校の後輩でとても良い人だったし、お願いした不動産会社もとても良い人で今でも業務は一任している。

マンションが完成した時も嬉しかった。周りのみんなから「おめでとう」とたくさん声をかけてもらったし、女一人の生活だったので収入面でも安心できると安堵した。それから何年かして次女と娘が引っ越してきて、今も一緒に住んでいる。

平成 30 年、80 歳の時に同い年の友人 3 人と豪華客船の船旅をした。この友人とは、四国八十八か所や都内のお寺などをお参りしたりして、仲が良かった。友人たちもそれぞれ悩みを抱えていたので、お寺参りをすることは共通の目標だった。

80 歳の誕生日を迎える年、誰からともなく、「私達も色々と苦勞をしてきたし、懺悔することはお寺参りで行ったし、これからは自分の人生を楽しもう。誰もお祝いなんてしてくれないし、自分達で自分のお祝いをしましょう」ということでフロリダ発の豪華客船の旅に出ることになった。

フロリダまでは船で行き、そこから 10 日ほど豪華客船に乗るプランだった。その船は本当に豪華で驚いた。スタッフを含め船内には 4000 人の人がいた。屋上にはバスケットボールやグランドゴルフのコートがあり、下の階にはアイススケートのリンクや劇場があった。劇場は 3 つあり、毎晩何かのイベントが行われていた。大きな街が海の上を移動するようなものでとても驚いた。今でもまた行きたいなあと思う。

余談だが、四国八十八か所参りを始めた理由は、私の靈感の強さにある。私は子供頃から靈感が強く、だれか知らない人が枕元に座って何度も頭を下げたりするようなことが度々起こった。こういったことが起こるのは非常に恐ろしいことだったので、お寺参り、特に四国八十八か所参りを行えばそれが良くなるのではないかと考えた。結局、お参り後も靈感が無くなることはないが、色々なお坊さんにもお話しが聞けて自分で整理ができたので、お参りする価値は十分にあったと思っている。

#### 【今までの人生で印象に残る出来事】

- 戦争中の色々な出来事
- 両親の介護やお世話が大変だったこと
- 銀行の方の「T 西さんは信用があるから大丈夫ですよ」との言葉
- 80 歳のお祝いで友人と夢にまで見た豪華客船に乗ったこと
- 四国八十八か所を含む色々なお寺を 3 年くらいかけてお参りしたこと

【若い人に伝えたいこと】

人には信用が大切だと思う。時代時代で色々なことは移り変わるけれど、信用は変わらない。信用があれば、自分が困ったときに必ず誰かが助けてくれる。信用がなければ助けてくれない。

今までの人生でも困ったことはたくさんあったが、いつも誰かが助けてくれた。それは私にもある程度信用があったし、信用を得るように生きていたからだと思う。信用を得るように行きなさい。

私は神様仏様はいると思っている。神様仏様が見ていてくれるので正しく生きていれば罰はない。正しく生きていればどうにかなる。悪いことばかりは続かない、必ずいいことが起こる。

【これからの人生をどう生きたいか】

- 楽しく生きたい
- これからも困ったときに助けてもらえるように信用を重ねるように生きたい
- 人は一人では生きていけない。出会った人にいつどこで助けられるか分からないので、出会った人を大切にしたい